現地校：出欠管理は、なぜ厳しい？

現地校から子どもの出欠や遅刻の問合せが、よくあります。
子どもに問題はありませんが、なぜ、こんなに頻繁に連絡があるのか心配です。
現地校がこんなに出欠管理に厳しいのは、何か理由があるのでしょうか？

現地校（11）

子どもの発達段階に応じた理由と学校自体の都合

小学校：学習指導のため

「出欠記録をみていると、子どもの学校外での生活や学習の様子がわかる。」現地の小学校の校長先生の言葉です。

アメリカでの教育は、学校と家庭の役割がはっきりしています。「子どもが学校で落ち着いて勉強できるように登校させる」ことを、小学校の先生達は保護者に期待しています。小学生の欠席や遅刻は、保護者の家庭生活のコントロールの不足とみなされます。当然その結果が、子どもの学校での学習や生活に現れてきます。

欠席や遅刻が多くなった子どもに、まず先生が事情や理由を聞きます。担任や校長から保護者に家庭生活改善の希望が電話で伝えられます。それでも続く場合は、保護者を呼び出して面談を繰り返します。

中学：生活指導のため

中学では学習や生活の指導に、出欠記録が活用されます。

中学校になると、勉強が質量共に増えてきます。教科によってはレギュラーやアドバンス（オナーズ）などと呼ばれる習熟度別クラスで、子どもの学力に応じた指導が始まります。この変化に、子ども達は勉強のプレッシャーを感じはじめます。「遅刻・欠席が多くなってくると、勉強が赤信号」とみなされます

また、中学生は思春期の真っ只中です。急激な身体的成長と並行して、反抗的な態度が目立ってきたり、生活態度が大きく変わってきます。学校が、友達との社会生活の場所へと変化してきます。身体的・精神的な急激な変化に自分自身がどう対応したら良いのか戸惑って、行動や生活のモデルとして学校の「友達」を大変気にするようになります。友達の影響（peer pressure）を強く受け、一緒に行動することが多くなり、家庭や学校での問題行動がしばしば見られるようになります。その変化が出欠記録に現れてきます。

遅刻や欠席、時には早退などが増えてくると、校長やカウンセラーの本人との面談に始まり、保護者の学校への呼び出しへと発展していきます。

高校：単位発行のため

アメリカの高校は、受講クラスの科目・種類や取得単位数で卒業が決まります。単位の発行は、受講クラスでの宿題やテストなどの学習成果に加えて、授業への出席日数・時間数を元にして決められます。

成績がたとえ「A」でも、一般的に、合計授業時間数の1割以上の欠席があると単位は発行されません。たとえば、年間授業日数は180日で毎日同じ時間割で授業があるとすると、学期（セメスター）の授業時間数90コマとなります。そのうちの1割、9回を欠席すると「F」がついて単位が発行されません。授業への遅刻や早退も「3回で欠席1回とみなす」などとして扱われます。

欠席や遅刻・早退の回数が増えてくると、土曜日や放課後などに補習させて、なんとか出席時間数を確保する機会を与えてくれる学校もあります。

学校：補助金確保のため

公立の学校を運営・維持管理をしていく基礎的なお金は、「学校に出席した児童生徒の数の毎日の平均（ADA）」に基づいて、州政府から補助金が出ているのが一般的です。

学校への補助金を少しでも多くもらうためには、一人でも多くの子どもが出席し、その出席者数を正確に把握・記録することが大切です。また、欠席や遅刻が「正当な理由」のあるものであれば補助金は支給されるのが一般的ですので、欠席した場合の保護者の届出やその理由の記録が欠かせません。そのための努力、出欠を記録する担当者やオフィスの設置など、学校区や学校は決して惜しみません。

「一人の生徒が無断欠席すると、１日に数十ドルをもらえない」と、ずいぶん昔に聞いたことがあります。学校の出欠管理に必死な理由がよく解ります。

松本輝彦

ここで述べた学校での出欠に関わる話は一般的なものです。実際のルールや運営方法等は、州・学校区・学校により大きく異なります。お子さんが学んでいる州や学校のルールがどのようなものかを、一度確認されることをお勧めします。